書評・新刊紹介

堀池信夫著『老子注釋史の研究　櫻邑文稿1』

髙橋睦美

堀池信夫先生は、令和元年十二月二十一日に逝去された。本書は、堀池先生にとって、生前に刊行されたものとしては最後の御著書ということになる。本書のあとがきによれば、本書は、古稀を祝う宴席にて敎え子諸氏に圍まれて勢い宣言した「老子解釋史」への想いを、『老子』關係の舊稿を集め、古稀の自祝的な論集としてまとめたものであるという。

以下、本書の構成をあげ、後文でその内容を紹介したい。

第一篇　魏晉六朝老子注釋史
第一章　王弼考
第二章　王弼再考―亡と非存―
第三章　大衍小記―王弼の易解釋一斑―
第四章　老子道德經序訣小考―第一段を中心に―
第五章　老子河上公注考略
第六章　生命論としての老子注―想爾小考―
第七章　顧歡老子注の思想
第二篇　老子玄宗注疏の研究
第一章　王玄覽の肖像
第二章　玄珠錄の思想

第三章　妙本の位置―唐玄宗老子注の一特質―
第四章　二つの妙本―老子玄宗注考―
第五章　妙本の形成―老子玄宗注思想の成立―
附錄　老子尊號・玄宗尊號連動年表
第六章　注の妙本・疏の妙本―唐玄宗老子注疏への一視點
第七章　老子玄宗注疏の理身と理國
第三篇　元明清の老子注釋
第一章　吳澄と老莊―朱陸問題と關連して―
第二章　吳澄道德眞經注考
第三章　李贄老子解考序說―ムスリム知識人としての李贄―
第四章　李贄老子解考
第五章　老子衍の風景―自序のスケッチ―
附篇
第一章　無（中國）
第二章　可道と常道―老子第一章道可道非常道をめぐって―

第一篇は魏晉六朝期の老子注釋に關する論文によって構成されている。このうち、最も古いものは第一篇第一章の「王弼考」で、昭和五四年に發表された論文である。かつてサントリー學藝賞を受賞した大著『漢魏思想史研究』「第三章魏晉期の思想」に收錄されたのは追記・再構成を經たものだが、本書では初出の形のまま掲載されている。

續く第二章は、二〇一六年に書かれた王弼考の續編である。まず前半では『三國志』や『世說新語』の記述から、王弼の人物像についての見解を述べている。それをさらに、かれの思想的態度、すなわち王弼自身が『老子』の思想の重要な側面、「無爲自然」「柔弱」を體得していたか否かという、王弼の思想考察において實は重要な問題にまで手を伸ばそうとしている。後半では、一九八〇年に刊行された樓宇烈『王弼集校釋』の成果を利用し、『老子指略』の檢討を行っている。その結果、傳統的生成論の性質を帶びた「道」概念から脫却した新しい「無」概念を確立しようとした王弼が、『老子指略』にお

いてそれを試み、さらになお殘された課題を乗り越えようとしたのが『老子注』であると位置づける。

第三章は『周易』「繫辭傳」の「大衍の數は五十にして、その用は四十九なり」という文章の「大衍の數」と、同じく繫辭傳中の「天地の數は五十有五」との關係について、王弼の解釋が有する特徴を明らかにしようとする一篇である。王弼は「大衍の數」の部分に「演天地之數、所賴者五十也」と注するが、著者はこの文章の「演」の賓語を「天地」と考えることで「天地の數」との直接的な連關が消滅し、それによって、漢儒らが行った五十と五十五との無理な整合化を必要としなくなったと指摘する。

第四章は、『老子』「河上公注」の序文として流布してきた「老子道德經序訣」について、その思想內容を考察する。「序訣」を三段落に分け、各段落を個別に檢討した結果、それが全體として神仙思想を根底におく宗教思想をもとに編纂されていること、さらにまた、それが靈寶派の影響下にあるであろうことを指摘する。

第五章は、第四章の考察を踏まえ、河上公注の內容的考察を行う。前述の「序訣」第二段以降を承けた說として神仙思想による注釋書と見なされてきた「河上公注」が、實はそれほど神仙色が濃厚ではなく、古來注意されてきたように、むしろ養生治國の側面が重要であったということに注目し、しかしそこにとどまるのではなく、「河上公注」では養生治國論の深層に、『老子』以來の「道」の思想の獨特な展開があるという考えから考察を行う。特に、「河上公注」中最も生き生きと機能している概念として「一」を取り上げ、それと相關連する「道」・「天地」・「氣」「和氣」の分析を通じ、養生思想としての「守一」の語を分析する。そして、該書の「一」が「道」の重要性に匹敵するものであったと指摘する。

第六章は、敦煌から發見された想爾注に關して、「生命論」をその骨格的主題ととらえて考察を行う。そして後文では、「道氣」という言葉を手掛かりに、想爾注は前述の立場に立つことによって、「道」は「氣」であると捉えていたであろうことを指摘する。超越的・形而上

的なものではなく、生命を形成する「氣」として「道」を設定することで、「道」から生命に至る過程が連續的になり、さらに「道」と生命とが同質なものということになるとする。

第七章では、南齊顧歡の老子注について取り上げている。當時、佛教と道教がその優劣を競い爭う中、顧歡は『夷夏論』を著し、兩者の調停を―ただし道教的立場を肯定する方向に於いて―はかった。その『夷夏論』と『老子注』とが近い時期に著されたものであることから、『老子注』檢討の前提として『夷夏論』の檢討が必要であると述べ、まずその佛道の根源的な一致を說く文章について取り上げ、續けて佛教側からの批判、さらにそれへの反論を檢討することにより、そこに顧歡の思想がしだいに內面的達成を重視する方向に向かい、そしてその至高の境地を「無爲無名」と稱したことを確認する。以上を踏まえ、後半では、「非有非無」という、般若の「空」の思想を說明する論理の影響を受けて「道」を解釋したということについて論じている。

第二篇は主に老子玄宗注疏に關する論文で構成され、それに初唐の道士王玄覽に關するものを加えている。第一章は、前半は王玄覽の思想內容について概括し、後半はその生涯についてまとめている。思想に關しては、王玄覽の思索が、般若の中道觀的思惟をその基盤とした、「四句」（テトラレンマ）を特徵とすると指摘する。後半部では、私度僧である王玄覽が、同時代の成玄英・李榮・司馬承貞ら「正規の道士」たちのように定められた過程を踏むのではなく獨學によったということこそが、その『老子』の「道」解釋を獨創的ならしめたのではないかとの見解を示している。

第二章は、王玄覽の語錄『玄珠錄』を檢討の對象とする。隋末・初唐における道教の、教理面展開での特徵的事態の一つが內丹の發生であるとし、その進むべき方向がフィジカル面から內面・精神的なものを重視する方向に轉換してきたこと、そして『玄珠錄』もそうした著作の一つであると指摘する。その上で、王玄覽のテトラレンマについて分析し、王玄覽にとっては實は、テトラレ

ンマの到達點は次の段階への出發點であり、「道」はまさにテトラレンマによる眞理把握を超えたその先に定位されるものであったと述べる。

第三章から第七章は、唐玄宗老子注及び疏に關する研究である。第三章では、まず注はほぼ玄宗の自著といえるもの、疏は玄宗の意を受けた集賢院學士や道士たちが著したものとし、兩者には方法的に差異があるものの、ともに「妙本」という概念が現れていることを指摘する。その「妙本」が具體的にいかなるものかということについて、玄宗注では「妙本」は從來の「道」概念を越える高次の位置づけを與えようとしつつも、一方で從來の「道」と同様の內容しか與えられていないと思われる部分も存在することを指摘し、それがいかなる理由によるのかということを課題として提起し本章を終える。

第四章は、第三章で提出された問題、すなわち「妙本」に二つの意味があることの理由・根據について檢討を行う。まず、玄宗注以前の『老子』解釋において、「道」と共に至高者・根源・始源とされてきた「無」が、玄宗注では直接的に提示されないことに注目し、これが、「妙本」が「道」以上のものとされるならば、當然「無」をも越えるものと觀念されていたであろうと指摘する。しかし一方で、「沖和の妙氣」＝「一」＝「妙本」と見なしうる資料もあり、だとすると「妙本」は「道」に下屬するということになり、上述のことと矛盾をきたす。このことについて、玄宗は成玄英の「妙本」をほぼそのまま繼受し、その位置づけのみを極高所に置こうとしていたが、その內容としては、新たな形而上學的世界を切り開くような獨創性を有してはいなかったこと、そしてそれは、玄宗の『老子注』著述の契機が哲學的關心よりもむしろ政治的なそれであったことに起因すると考察している。

第六章では、まさにその玄宗が「妙本」を必要として政治的な理由を明らかにしようとする。そこでまず玄宗の生い立ちからその人格形成の過程を概觀し、さらに唐初より始まる老子始祖說の流布と皇帝・國家による老子尊崇と道敎優遇のあり様について見る。そして、そのよ

うな道教・老子尊崇の延長線上にあり、またよりその傾向を著しくした玄宗が行った具體的事業とそれに伴いなされた發言について確認し、玄宗において、老子は歴史上の人物であり、信仰對象であると同時に遠祖でもあり、さらにはその血縁關係が自身と老子との同一意識をもたらしていたと指摘する。そしてこの意識を學問的に確認しようとしたものこそが『老子注』であり、内容的には從來の「道」とさして變わらない「妙本」を至高のものと位置づけたのは、玄宗が自身を單なる皇帝ではなく、神格性を伴う存在としての老子となることを、理論面で支えようとするものであったからだと述べる。

第六章では、「妙本」について、『老子注』と『老子疏』とで比較檢討を行う。玄宗『老子注』の「妙本」は世界を超越して統治する現實的至高者、すなわち玄宗自身を象徴する概念としての意味が先立ち、論理的には二面的・矛盾的であった。それに對し『疏』では「妙本」＝「道」であることがくりかえし明言されているという。それは『疏』においては、「妙本」が純粋に哲學的・思想的な概念として扱われていることを示すものであり、その點で『注』と『疏』には立場の相違が見られると指摘する。

第七章は、玄宗『老子注疏』の理身理國の思想を檢討の對象とし、それが傳統的な道家的治身治國論と比較していかなる特徴を有するのかということについて分析する。その結果、河上公注以來の身體涵養論から、玄宗『老子注疏』においては精神涵養論への方向轉換が見出されるとし、そこに司馬承貞の『坐忘論』の影響を指摘する。

第三篇は、元明清の老子注釋と題し、第一章・第二章で吳澄を、第三章・第四章で李贄を、第五章で王夫之を取り上げる。

附篇に收めるのは、『岩波哲學・思想事典』の「無」の項目として書かれた文章と、『六朝學術學會報』のために書かれた、『老子』第一章に見える「可道」と「常道」についての考察である。

本書に收める諸論考で、堀池先生は魏晉から清に至る

まで、幅廣い時代の様々な老子解釋について考察を行っている。それぞれの注釋書についてその解釋の特徴、およびそのような解釋がなされるに至った思想史上の趨勢、注釋者自身の內的動機などが、丁寧に、また生き生きと再構築されており、その點まさに「老子注釋史」の名にふさわしい。本書は、このように多様な解釋について各々明らかにしているようでいて、實は一貫した關心に基づいて考察がなされていると思われる。それは、畢竟『老子』の「道」をいかに位置づけるかということでもあるのだが、王弼における「無」、玄宗注における「妙本」など、從來の「道」の範疇を超えるものとして位置づけられる概念の、その形而上學的論理を明らかにすることではないだろうか。『老子』本文で述べられる「無」と「有」の關係、あるいは「道」と「一」の關係は、様々に理解しうる可能性を潛在的に有するが、各注釋者がその問題にいかに挑み、その結果何を至高者と見なしたかという點に、各注釋の特徴を見出し、その變遷によって、多彩な『老子』解釋史をひとつの思想史として編むことに成功していると言える。今、この著書によって、堀池先生の生涯を通じた思索の跡を一度にたどることができることは讀者にとって望外の喜びである。

（A5判、五五三頁、二〇一九年十一月、明治書院、八〇〇〇圓）